



写真3 鎌倉の大仏、19世紀後半（左）と現在（右）

が見えただろうかという心象を構築することができれば、そのテーマをより深く理解できるということは一般的によく知られた事実です。そのため明治時代に建てられた都内の建物（東京駅、明治神宮）や1930年代に造られた場所（銀座、お茶の水大学）を訪ねました。また、19世紀後半に訪日した西洋女性旅行者の話に登場する横浜の場所にも行きました。その場所はウォーターフロント沿いの遊歩道と外国人居住地で、英語で「ザ・ブラフ」と呼ばれていました。

今回の研究調査旅行の最後として、私は鎌倉を訪れ、鎌倉時代に関連する場所や19世紀後半の西洋人の観光

旅行地であった場所も探索しました。その後、現存する江戸時代の侍家（武家屋敷）を見学するため佐倉市に赴き、最後に、江戸時代末期に造られた商店街を体験し、それを大正時代にできた類似の街と対比するために川越へ行きました。神奈川大学の学生（チューター）の協力を得て国立歴史民俗博物館も見学しました。魅力的で見事に陳列されたギャラリーをじっくり見学し、カナダで一般的に教えられているような日本の歴史とは大きく異なる歴史を新たな観点から学ぶことができました。また、外国人の視点ではなく、日本人自身がどのように自分たちの歴史を見ているかを理解することもできました。

博物館には日本の民俗文化に焦点を当てたギャラリーもあったので、日本に長期滞在しないと見られない日本文化の基礎的な部分も僅かながら学ぶことができました。

非文字資料研究センターの親切な支援のおかげで日本に滞在した18日の期間に研究に必要な資料を収集し、この研究の視覚的、地理的コンテキストを探索することができました。日本の歴史を学び、日本の日常を体験することもできました。

この経験は私がアジア研究で博士号取得を目指す上で、大きな助けとなることと思います。ありがとうございました。

身体で理解するということ



加瀬丹野ジュリアナ
(サンパウロ大学)

遠くブラジルから日本に来ることは、地理的に移動するだけでなく、時間を移動することでもある。

時間の移動には、昼から夜だけでなく、季節の移動もある。

違う環境にいるという感覚は、自然だけでなく、歴史や文化にも関連する。

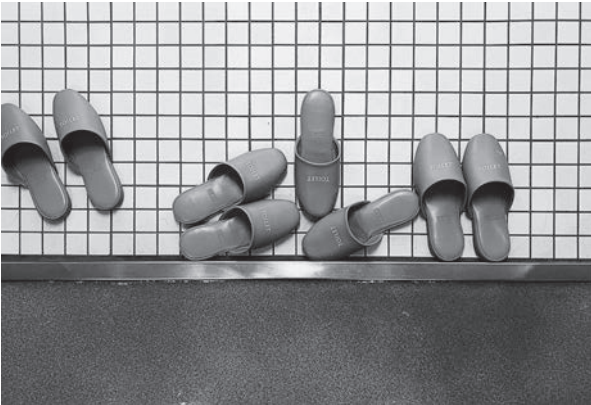


横浜市 久良岐能舞台

視界の変化は、表面的なものだけでなく、実体のない主観的なものでもある。

横浜の神奈川大学非文字資料研究センターが提供する交換プログラムに参加し、2018年冬のあいだ滞在を延長する決断をしたことで、私は実際に自分で経験することでしか得られない様々な知見を得ることができた。人生における出来事の意味を見いだすという意味での経験⁽¹⁾は、知的、学問的分野にとどまらず、身体全体を使った理解にも及び、その身体には感覚と心と感情も含まれる。

特に日本文化について学ぶ場合、ヨーロッパ発祥の科学的思考がルネッサンス以降（14世紀半ば以降）たどってきた道筋とは全く異なる、物の理解と知覚の方法があると知ることが重要である。科学的論理が価値を持つためには合理的なものと感じ的なものを分ける必要がある



神奈川大学 国際寮

のに対し、日本には明治時代（1868-1912）まで思考と感覚という二分法が存在しなかったことは明らかである。動法⁽²⁾の開発者である野口裕之（1948-）によると、

日本の教育は身体の教育であった。頭で憶えることより、「身体で覚える」ことに重きが置かれ、頭で理解することより、「身体で感じとる」ことが尊ばれたのである。

（『動法と内観的身体』1993、p. 4）

こうして私は、自分自身の身体の知覚から日本の文化芸術表現を経験しようと、能の公演やリハーサル、舞踏のワークショップ、動法の稽古などに参加した。また、一時的に日本で生活した。それはすなわち、自分が慣れているものとは異なる建築規模で暮らすこと、異なる動きや扱いを必要とする和服を試すこと、土地の人間には明白だが私には見えない内的外的限界の存在を知ること、沈黙を重んじること等を意味する。これらのことは、これまで自分が訪れた西洋のどの国とも依然として異なっている日本人独特の知覚があることを私に教えてくれた。

同時に私は、大都市には（程度の差こそあれ）見慣れた構造があることや、新自由主義の価値が広範に受け入れられ、現地の価値に取って代わっていることも知った。

David Harvey（1935-）は次のように証言している。

新自由主義化のプロセスは多くの「創造的破壊」を引き起こした。その対象は、従来の制度的枠組みや権力（国家主権の伝統的形態に対してさえ異議申し立てが行われた）だけでなく、分業、社会関係、福祉供与、科学技術構成、生き方、考え方、生殖活動、土地への愛着、心の習慣にまで及んでいる。新自由主義が市場での交換を「それ自体が倫理であり、人間のすべての行動の指針となることができ、従来のすべての倫理的信念に取って代わるもの」と評価している限り...

（『A Brief History of Neoliberalism』2005）

1500年以上にわたって美しく発展してきた日本の身体動作を維持することは、新自由主義による大衆化プロセスに抵抗することをも意味している。抵抗は、メディアが流布するあらゆる価値と現代社会の快適さの中で、批評眼と自己肯定を必要とする非常に困難な行為である。しかしこの身体動作は、難しい、ペースが遅い、理解しにくいと言われながら、今日でも能や舞踏や動法で実施されている。そしてこれらはすべて、心、感情、感覚という万人に共通のものに関わっているのである。

【注】

(1) 「経験」については、ヴァルター・ベンヤミンのエッセイ“Experience and Poverty”を参照。参考テキストはポルトガル語版 Eperiencia e Pobreza in Obras escolhidas. Vol. 1. Magia e técnica, arte e política. Ensaaios sobre literatura e história da cultura. São Paulo: Brasiliense, 1987, pp. 114-119.

(2) 動法は東京の整体協会・身体教育研究所所長 野口裕之によって開発された。野口は父親の野口晴哉（1911-1976）によって開発された整体法の観点から、日本の芸術文化表現の多くに見られる身体の動きの原理と感覚的理解について研究した。

参考文献：

野口裕之「動法と内観的身体」『体育の科学』第43巻 第7号 1993
 〈http://keikojo.com/koukaikouwa_schedule_files/1993_doho_to_naikan.pdf〉2018年1月24日閲覧
 HARVEY, David A Brief History of Neoliberalism. New York: Oxford University Press Inc. 2005

相互交流の重要性に気づいた研究員生活

田 哲熙
 (漢陽大学校)



神奈川大学非文字資料研究センターで1月11日から

31日までの3週間、訪問研究員として滞在した。私は